

復刻版

層雲 城の会句集Ⅲ

鯨のたわ言(Ⅲ)

ことしはほんとに、暑いながい夏でしたなも。この句集が皆さまのお目にかかっている頃は、多分年の暮れか、新年に成ってますかと、思いますかなも。いま、この鯨のたわ言書かしてもらってますが、まだまだ暑いまっ盛りで、全く参ってしまいますがなも。

今年は梅雨明けがあんまり早かったもんで半月も余分に、あつい夏を過さんならん。やっぱり、梅雨で雨で、期間だけは普通にあった方がよろしいはなも。とかなんとか、人間なんて勝手なもんで、梅雨中は、うっとおしいなも、ええかげんにはよ上がったらええになも、とか、こたくせんばかり並べて、いざはよう上がり過ぎると、今度は暑い暑い、人間はやっぱりバチ当りばかりでしょうかなも。

まあ、わたしらの日本国も、ええかげんひどい、困った国になりましたわなも。せっかく出かした米は、余ってる余ってるっていう豚に喰わせたり、どうやらせると何やかんや云って海へ捨てるだけなし、高度成長しただか、なんだか、知らんが輸出入ばっかりに、頼ってるがなも、一体どうなることだろうなも、おまけに円高だとか、不景気だとか、ヒイヒイ、ワイワイ。こんなこと今更、当り前の

ことだと思いがなも、これが敗戦国のそれも三十数年経った、後遺症だら
いのこと解らんでしょうかなも。あれあれどうしてこんなこと、こんなときに書
き出したらうなも。ご免やす。ご免やす。

こんなこと、俳句や詩をやる人間には、無関係だったですなも、ええ、やっぱ
の無関係では、いかんことですかなも。

そういえば、自由律俳句がどうの、一行詩がどうの、と（まあ名称のことだろ
うと思いがなも）また始まったらしいですなも。それこそ、わたし等には、
あんまり関係ないと思いがなも、そう云うことは頭のええ、先生方に任かし
て、わたしらは、黙って下手な句でも詩でも出かしとればええ、と思いがな
も。

とかなんとかまた、つまらんことばっかし云いましたが、堪忍してちょうだい。

第三句集、それこそ、てんやわんやな句ばかり、めいめいが並べましたが、ほん
とくに済まんことで御座いますなも、おひまなときにでも観てやって頂戴すか。

そしてだんと、叱ってやって頂戴なも。

城の会一同

昭和五十三年（一九七八年）八月

目次

佐藤百秋

鬼頭いわお

加藤定一

吉田雅童

和田晴彦

伊藤清雄

下村直樹

木曾士門

佐藤百秋（本名 清）

明治四十二年生

職業 日本画家

梅雨の晴れ間に隣からきた話のたね

田螺かくれた毛深いおんな

もち越すしあわせがその日ぐらしで

日課として上手に芥燃やす老となる

日かげりひぐらしの啼く湯につかっている

鈴は二人で鳴らそう桜月夜の権現さま

尼僧これはこれは情のこもった若き日の話で

色づいて時雨れる鎌切りの死とする朝

余命いくばく年金窓口でいたただく

人形、目に手をあて泣いている語り手

朝なぎ遙けしポンポン船の一条の水尾

ままごとの母になった姉は死んだが

水鶏 雨戸をたたく夜の寝酒とする

ちよっとそこまでおくれたお月さんとかえる

お盆のふる里に帰った月とわたし

今日もよい日で川が流れている

寒月ころして歩む足もとがわれる

籾殻焼く火の赤々と野良の夕となる

つくしつくつく頭もたげてだんらん

もうしかってはくれぬ亡母はの写真はが出てきた

鬼頭いわお（本名 岩男）

大正二年生

職業 教員

若葉が匂う柿の木は残したい

つばき一輪おちてしじまをつくる

つばき緑の絵に一点の紅を落とす

五年ぶりの鶯の声少し早い雨戸を繰る

ガラス越しに手を振る子に病院を出る

相変らずの餓鬼大将住所も書かず賀状送ってくる

五月晴れ朝顔の苗思案する

東京から九州に話をとばし退屈させぬあんまさん

母の日、じまんの寿司つくる母をもつ

連休外国飛行機満席列島不景気圏

殊に美しい朝顔選んで種とるしるし結んでおく

ぶどう狩り自分には一房もあればよい

グラジオラス竹に支えられて燃えている

のろのろと連なる車にせかせかと時計の針

ラジオ体操、万緑は跳躍の中に入って来る

蟻の道さんざん廻って厨の下にたどりつく

高麗人参茶いただいて何か爽かな出勤いたします

主人と足音を聞きわかる犬でもう気付いている様子

幾度死のうとしたことか淡々と語り精薄児の母

注射器に薬吸わせる限界ためつつすかしつ

加藤定一

大正四年生

職業 染料販売業

理屈も何もないみんな飯喰っている

門に竹青く涼しい人が住んでいる

広い世間の出来事が部屋の片隅に映る

座席ゆったりと音に身をまかせ

幼い靴が一足もうかえってしまっていない

誰が来ようこの暑さ明け放しの裸でいる

重い梅雨空に息づいて茂っている

はだかで地をたたたく雨を見ている

夕風へ一日のからだをおく

どっかりと下した尻が足を休ませる

薄紙を剥ぐように病室の窓が白んでくる

倒産の家むかしからの虫が鳴いている

寝がえりをうつつ遠い汽笛

女水を出し放しにしての重大な話がある

独酌の雨音を味はう

日向をもてあましている縁側

しずかに煙草のけむり双方の云い分をきいている

夕闇の中の人声がまだ動いている

枯野へ流れ出ているささやかなくらしの水

ひとつの門燈が夜を深めている

吉田雅童（本名 雅彦）

昭和四年生

職業 染色業（旗、幕、幟）

あ の 鬼 瓦 に お ち た 雷 だ と よ

石 に 雨 ふ る 短 律

は ば かり な が ら い ま は ば かり に 居 り ま す る

お ん な か な し び に く れ て よ り え も ん し へ る じ っ て い く は

月も病んで撮られることか

キャップとペンとしばしそのままできるとき

風、月はまた雲と訣れる

しかし、今宵月のシナリオに雲はなかった

この池も埋められますよお月さん

空き巢に夕日を懸けた蜘蛛の不在証明^ア_リ^バ_イ

花は月の出の明日を推理する

鳥が一羽訃に降りた街にはやっぱい夕焼なかった

どうしても出てくるにやっにぎりにぶしで拭く

シリアスなその道であった殺人現場への道であった

出発とは結末のまたそんなドラマが始まる

ストの是非論土筆摘まれて筆にある

暮れなずむ、蜘蛛の動かぬ殺意

ふられちまってひらきなおった花ですわ

昼月、花に追われた蝶の隠れ家

しかし遅すぎた、濡れすぎた花の言葉

和田晴彦

昭和二十二年生

職業 公務員

枯葉と私と旗は冬の風楽しむ

朝の鳩は屋根の上おのぼりさん見ている

月が星を呑もうとする冬の空です

雲を遊ばせているなにもない庭

ガラスの向こうの風景が春をささやく

二人の話風が聞いていってしまった

今日はいろんな事がありました、お月さん

白い靴光らせて夜の風に消える

草の上にいる空に雲少し遊ぶ

雲遊ぶ、少年の竿光らしている

杉の木こんもり山が背のびしている

石仏は青草の中考える人は雨の中で

ちよつと肩光らせて小壺座っている

石の楽しみよ鈴虫を聞く

干鰈の目になにも見えていない

ちよこんと買物籠に犬が一匹祇園町近く

青空の下旗日の旗が汚れている

赤い月がでていて風眠っている

人々の目の中にいる

青空、夢多い鳩飛んで行く

伊藤清雄

昭和二十三年生

職業 会社員（金型製作）

陽のスケッチブックアラバスターになった少女

大声地平線に消え点^{とも}りはじめる

瞽女は後姿ばかり夜桜の道

空白を重ねていく夜虹漏れる

陽
が
海
に
夢
た
く
す
白
樺

寒
風
鮫あんこう
先生
の
弁
舌
は
続
く

議
論
続
か
せ
ア
ン
バ
ラ
ン
ス
な
風
に
な
る

若
葉
ふ
ん
わ
り
鉄
の
音
階

少女のそき込むと緑におぼれる銀河

真っ二つに裂けた木が放つシーラカンスの独り言

子供が大地に画く神の化石

大きく息を吸い崩れる音

花
び
ら
風
に
乗
る
メ
ー
ビ
ウ
ス
の
帯

オ
カ
リ
ナ
流
れ
る
真
珠
の
あ
ぶ
く

深
海
の
ボ
レ
ロ
銀
線
に
触
れ
る
雪

躰
湯
に
う
か
せ
A
B
C
と
遊
ぶ
蝶

表紙の外のページをめくる黒い太陽

石ころが捨ててくれた夕日です

拍手ごめんなさい

さらに白い岳発音

下村直樹

昭和二十五年生

職業 画廊経営

丸め込んだパジャマに夢の系譜途切れたまま

俺の腑分から完成しよう解体新書

不吉な鳥がめざめるオーブンの中のパン

暖めてきた未改札の切符に鋏を入れる

能面の裏に潜む沈黙の果实

平野で育んだ凸凹への憧憬

鬼の優しさ知った鬼の号泣

いま表出する扇状地の伏流

僕のジャーニーに横積みされた本の欠伸

凍える愛の確かさ つらら太くなってゆく

あいつ飛んでいったけど弾痕一つ残した

おれとおまえが在る 淋しさに鉢巻をして

運河に顔おとすと仮面浮きでてくる

沸騰する海に乗り 青年風を操る

密造酒飲みすぎた底なし沼の蛇の昇天

とどろ巻けない蛇が底なし沼に石を産む

風がさらう鱗粉風で押し止めている蝶

未知の闇へ虹を架け妊婦一枚の布を裁つ

闇に同化した鏡に夜はふくろう啼きにくる

よな夜な踊りでる密葬したピエロの反骨

木曾士門（本名 佐藤進）

職業 会社員（旅行業）

昭和二十六年生

女に他愛ない話をしてそれが輝かしい日であるように

妻の経度に僕の緯度 狭い地球儀にこの児の誕生

やわらかに平明に乳房吸いひかりの産毛

何事もなかったような日々をお前とめくっている

縫い目からこぼれたパン屑のぼろぼろ涙より哀しく

北に濃尾の野。人々いち早く冬眠す

一億年の思慕に堪え君よ成層圏へ翔とべ

一日が了る。ああ、美し過ぎる運命論に似て

くびれた腰から生命いのち崩れてゆく砂時計のことなども

陽は灼熱の神より烈しく草いきれ

コーン焼く夕空の何処か人骨の芳ばしさに似て

春日、石に抱かれ孵化している

カーブ過ぎれば怒涛浴び僕ら彎曲し果てる

葉脈透けて見える陽がみどりの時を打つ

まさぐれば記憶にぶらさがった蝶の翅が厚く

寝起きに接吻、ああ朝を脱皮する

青空遠く身を投げ棄てて、果ててしまいたい

空が下痢模様なので僕は想像をたくましくする

空の青さに鳥が棲むその中の太陽の位置

夜がいい匂いさせみんな睡ってしまった男の夢

作品においては、今日では表現として不適切とされる語句を含むものが

ありますが、作品が発表された時代の状況を鑑み、原文通りとしております。

層雲 城の会句集Ⅲ

発行 昭和五十三年（一九七八年）十一月三十日

発行元 城の会

復刻 令和三年（二〇二二年）一月十五日再発行

復刻責任 木曾士門

